

令和5年度国外研修報告書

「ドイツ・日本・英米との比較から見た
フランス現代哲学の主体・人格概念（愛・性・家族を軸に）」

研修先：ENS : Ecole Normale Supérieure

フランス・パリ高等師範学校

研修期間：令和5年8月10日～令和6年8月10日

研修協力者：Professor Caterina Zanfi (カテリーナ・ザンフィ教授)

(国外研修員)

所属 国際文化学部国際文化学科

職名 教授

氏名 藤田 尚志

1. 研修テーマ

今回の国外研修のテーマは「ドイツ・日本・英米との比較から見たフランス現代哲学の主体・人格概念（愛・性・家族を軸に）」であった。ベルクソンを始祖とし、ドゥルーズ、デリダ、フーコーで頂点を迎える「フランス現代思想」や「ポストモダン思想」として知られる思想潮流は、しばしば「主体性の否定」を標榜していると捉えられてきた。これに対して報告者はこれまで、科研費やKSU基盤研究などで、「彼らの思想の眼目は、主体概念の否定ではなく、その批判つまり練り直しである」という主張を論証する研究を展開してきた。今回の国外研修では、（1）ドイツ哲学、とりわけフランクフルト学派とベルクソンの関係、（2）愛・性・家族に関する近現代日本精神史、とりわけ森崎和江の思想とフランス近現代思想（フーリエ、レチフなど）の共通点、（3）英米系の分析哲学や先端諸科学とベルクソン哲学の関係について研究を進める中で、様々な角度から人格概念の練り直しの可能性を照射するように努めた。例えば、（3）口頭発表④では植物を、⑥では動物を扱っているが、これらも人間の主体性・人格性との関係において捉えることが可能である。

2. 研修先・期間

研修先はフランスの哲学研究機関の最高峰の一つである École normale supérieure（通称 ENS）で、所属期間は 2023 年 8 月 10 日から 1 年であった。受け入れ研究者の Caterina Zanfi（現ベルクソン国際学会会長）とは博士論文執筆時からの研究仲間であり、イタリア・ラクイラ大学での国際シンポジウム共催や、フランス・パリ ENS でのアトリエ・ベルクソンへの招聘なども含めた研究面のみならず、今回の受入れに伴う煩瑣な事務手続き、住居の紹介など公私にわたって支援を受けた。記して感謝したい。

3. 研修概要

（1）ドイツ哲学、とりわけフランクフルト学派とベルクソンの関係

ベルクソンと同時代のドイツ哲学の関係については、上述の Zanfi の研究書 (*Bergson et la philosophie allemande 1907-1932*, Armand Colin, 2013) があるが、報告者は、それ以前のドイツ哲学、とりわけベルクソンとの複雑な関係が指摘されてきたカント哲学（①③④）、そして同時代以後のドイツ哲学、とりわけフランクフルト学派とその周囲との関係（②）について研究を進め、下記 4 件の口頭発表をフランス、イタリアで行なった（イタリアでの国際シンポジウムは共同オーガナイザーの一人を務めた）。

①« *La main de Bergson revisitée* »、アルノー・フランソワ (Arnaud François) 教授の大学院セミナーにおける仏語での口頭発表 (フランス・ポワチエ大学、2024年4月8日)

②« *Bergsonian Left autour de l'Ecole de Francfort ? Bergson avec Adorno, Arendt, Benjamin* », *Atelier Bergson Programme 2023/2024* 「ベルクソンの受容：アドルノとマルティネ」における仏語での口頭発表 (フランス・パリ ENS-Ulm、2024年5月14日)

③« *La main de Bergson II. L'organologie revisitée* »、カント生誕三百年記念国際シンポジウム「*Bergson face à Kant*」での仏語口頭発表(伊・ラクイラ大学、2024年5月31日)

④“*Schematism revisited. On Bergson, Kant, and Heidegger*”、Massimo Adinolfi 教授の研究セミナーにおける英語での講演 (イタリア・ナポリ大学、2024年6月3日)

滞在期間に執筆された研究成果としては、香田芳樹編『カリスマ教師とその弟子たち(仮)』(2025年刊行予定) や大橋洋一編『文学理論の名著 50』(平凡社、2025年刊行予定) などに所収予定の 2本の論文がある。滞在期間中に発表された研究成果 3本は以下。

①藤田尚志・鈴木泉・納富信留・平井靖史「哲学と時間——ベルクソン『時間観念の歴史』合評会記録」、『九州産業大学国際文化学部紀要』(九州産業大学国際文化学部) 第 83 号、2024年3月、29-68 頁。

②「ベルクソンと芸術——「器官-障害の弁証法」の美学的応用」、『九州産業大学美術館記録集 2023 「美の鼓動・九州」クリエイター・アーカイブ Vol.4 たいせつなあいまいさ』(九州産業大学美術館)、2024年3月30日、9-10 頁。

③Quand un philosophe japonais découvre le Chjam'è rispondi, Rivista Robba (ウェブ上のコルシカ文化雑誌)、2024年5月31日。

在外研究中に交流した研究者は数えきれないが、同じく古くからの友人たち、パリ・ナンテール大学教授 Elie During、パリ・カトリック大学文学部長となった Camille Riquier、ポワチエ大学の研究員 Sébastien Miravète は、あるいは自らの大学に招いてくれ、あるいは私的に議論を交わし、次年度以降の共同研究を約束した。最後のミラヴェットとは、2025年6月にフランスで教育哲学の学会でベルクソンに関する同じパネルに参加予定である。イタリア・ラクイラで行なった国際シンポジウムに関しては出版が決定した(2025年刊行予定)。

(2) 愛・性・家族に関する近現代日本精神史、とりわけ森崎和江の思想とフランス近現代思想(フーリエ、レチフなど)の共通点

近現代日本思想史、とりわけ森崎和江に関する研究はまだ公にするには程遠い段階であるが、現在副会長を務める社会芸術学会で来年度、森崎をめぐるシンポジウムを企画している。フランス現代思想に関しては①、フランス近代思想（18世紀の異形の作家レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ、19世紀の空想的社会主义者フーリエ）に関しては②、英米系の最新の動向に関しては③と、下記3件の口頭発表を行なった。

①「タペストリーの裏側——渡名喜庸哲『現代フランス哲学』を補綴する」、第33回フランス政治思想研究会：渡名喜庸哲『現代フランス哲学』（ちくま新書、2023年）合評会における口頭発表（日本・東京大学社会科学研究所+ZOOM、2024年6月26日）

②「フーリエにおける結婚の脱構築」、マキコミヤ 2024 イベント「フーリエを笑い者にするとき、私たちは何を犠牲にしているのか～『フーリエの新世界』刊行記念イベント」ビデオ出演による口頭発表（日本・福岡・本のあるところ ajiro+ZOOM、2024年7月15日）

③「愛・セックス・結婚の哲学の現在——R・ハルワニ『愛・セックス・結婚の哲学』監訳者に訊く」、マキコミヤ 2024 イベントにおける司会および討論（福岡大学+ZOOM、2024年7月21日）

滞在期間中に刊行ないしウェブ上に発表された研究成果4点は以下。

① « Introduction au colloque Revies - de Rétif de la Bretonne : Subjectivités, Généalogies, Morales », *Études rétiviennes* no. 55, décembre 2023, pp. 9-11.

② « Déconstruire le mariage : Rétif entre Rousseau et Sade », *Études rétiviennes* no. 55, décembre 2023, pp. 109-127.

③連載「結婚の哲学史」、慶應義塾大学出版会のnote上にて（2024年1月～7月）。

④「分人主義的結婚論の先駆者フーリエ『愛の新世界』とヘーゲル『法の哲学』における遺産相続の問題」、福島知己編『フーリエの新世界』、水声社、2024年7月、161-210頁。

日本に招聘したこともある Patrice Maniglier と Jeanne Etelain の主催する SPHePS (Séminaire Permanent d'Histoire et de Philosophie du Structuralisme) は、報告者の滞在期間中、「構造主義とフェミニズム」についてのセミナーを開催しており、定期的に参加し、現代的な議論の展開に関する知見を得た。レチフ・ド・ラ・ブルトンヌに関しては、2025年

9月にフランスで国際シンポジウムを開催することで合意している。上記連載③に関しては、続編を開始し、数年以内に著作として刊行したいと考えている。愛・性・家族の哲学に関する大規模な国際シンポジウムを計画しており、すでにパリ・ナンテール大学のティエリー・オケ教授には共同オーガナイザーをお引き受けいただいている。

(3)英米系の分析哲学とベルクソン哲学の関係について研究

現在、私の属する研究グループ PBJ (Project Bergson in Japan) では、英米系の分析哲学との共同作業が加速度的に進展している。とりわけ、クルケン・ミカエリアン教授が精力的に推進しているグルノーブル大学の記憶の哲学センターとの共同ワークショップは、すでに3回を数える。私自身も積極的に参加し、今回の滞在中も研究発表を行なった (①)。PBJ の活動は、分析哲学との共同作業 (⑦) 以外に、先端的な諸科学との接合 (②④⑤⑥) と伝統的な思想史研究 (③) を基軸としており、それらへの活動も継続している。下記7件の口頭発表や司会・討論を行なった。

①“Bergsonian theory of memory in the causalist- simulationist debate”、クルケン・ミカエリアン教授らと共に催した国際ワークショップ “Remembering : Analytic and Bergsonian Perspectives 3” における英語での口頭発表(フランス・グルノーブル大学 (Université Grenoble Alpes) 記憶の哲学センター、2023年11月17日)

②「ベルクソンにおける注意をめぐって」、《ベルクソン『コレージュ・ド・フランス講義記憶理論の歴史』合評会第一弾：現代諸科学との接合編》での司会および兼本浩祐氏（愛知医科大学名誉教授）・澤幸祐氏（専修大学）らとの討論（ZOOM、2024年1月29日）

③「ベルクソンにおける記憶をめぐって」、《ベルクソン『コレージュ・ド・フランス講義記憶理論の歴史』合評会第二弾：思想史編》での司会および中畠正志先生（京都大学名誉教授）・山口裕之先生（徳島大学）らとの討論（ZOOM、2024年3月13日）

④« La rythmesure revisitée. Quelques réflexions à partir du *Bergson structuraliste* de Sébastien Miravete »、ミラヴェットが刊行した *Bergson structuraliste* の合評会 (Atelier autour du livre de Sébastien Miravete) での口頭発表 (ZOOM、2024年3月27日)

⑤« La philosophie plante de Bergson. Un bergsonisme élargi »,ティエリー・オケとエリー・デューリング主催のセミナー (Séminaire Objets/Projets Programme 2024 : Enquêtes) での口頭発表 (仏パリ・ナンテール大学 (Université Paris Nanterre)、2024年5月16日)

⑥「ベルクソンと動物たち」、マキコミヤ 2024 イベント「ベルクソンと動物たち」における司会と討論 (ZOOM、2024 年 7 月 22 日)

⑦“Directionality and Disposition. Some Reflections on Analytic and Bergsonian Approach” PBJ 国際ワークショップ"Dispositions, Virtuality, tendency. Bergson and the Metaphysics of Powers"での口頭発表(英ベルファスト (Queens University Belfast)、2024 年 6 月 11-12 日)

滞在期間中 (あるいはその後) に刊行された研究成果 3 点は以下。

①アンリ・ベルクソン『コレージュ・ド・フランス講義 記憶理論の歴史』の翻訳と「訳者あとがき」(385 - 406 頁)、書肆心水、2023 年 10 月。

②「人格性について——分析哲学的自己論とベルクソンの表現的自我」(160-171 頁)、「プロジェクトの”持続”とは何か (あとがきに代えて)」(342-346 頁)、「PBJ 活動記録 (2007.4-2024.3)」(347-355 頁)、平井靖史・藤田尚志編『〈持続〉の力——ベルクソン『時間と自由』の切り開く新地平』所収、書肆心水、2024 年 7 月。

③ “Rhythmeasure revisited. Duration-Number, Multi-Time Scale Theory, Ethics of Démasure in Bergson's Philosophy,” Síntese: Revista de Filosofia Vol. 51 No. 160: O pensamento e o movente - 90 anos, Belo Horizonte : Faculdade Jesuítica de Filosofia e Teologia, September 2024, pp. 287-314.

記憶の哲学センターとの国際ワークショップは、2025 年 6 月に 4 回目を計画している。音楽療法士との共同作業である「リズム哲学研究会」、動物行動学者や神経科学者たちとの共同作業である「ベルクソンと動物たち」の続編および出版も計画中である。

おわりに

滞在中の研究概要や研究成果についてはすでに記した。最後に、研究を上下から支えることについて二点記して筆を擱くことにしたい。

一点目は在外研究を下から支えるもの、つまり家族についてである。実は、この研究滞在は、家族の記憶の病によって苦悩に満ちた激動の一年となった。記憶の病は、旧知の人間をある種“異邦人”とするところがある。そもそも外国では私たちが異邦人なのだが、外国人たちに囲まれ、かつ家の中にも時として“異邦人”が出現するという事態は、家族みんなを（本人さえをも）疲弊させた。その中で日々、家族を支え、家族に支えられつつ、何とか形だけでも研究を継続できたことに対して、誰に認められることがなくとも自らの誇りとしたい。

二点目は在外研究を上から支えるもの、つまり研修制度についてである。国外研修の規定はずいぶん昔に作られたものらしく、現状と釣り合っていない部分も散見された。例えば、当初は「フランスに研究滞在する資金が大学から出されている以上、イタリアで研究発表をするための旅費を科研費から支出することはできない」という規定になっていた。理解に苦しむが、規定が作成された時代にはフランスの図書館に閉じこもって滞在期間を過ごすということだけが想定されていたのであろう。しかしながら、現在ではフランスを拠点として、世界中で研究発表を行なうことはごく普通の事態である。人事課や产学共創・研究推進本部の職員さんは、私の話に辛抱強く耳を傾けてくださり、規定の修正に応じてくださった。ご対応ありがとうございました。

もちろん、まだまだ課題も多い。例えば、日本で行なわれる学会に参加するための旅費を科研費から支出することが依然として認められない、高騰するヨーロッパの物価に対して支給されている額は果たして十分か、といった問題である。国外研修を予定している教員には、出発前に規定を十分読み、修正を希望する場合は早めに相談することをお勧めしたい。

そういう問題はあるとしても、このご時世に一年間、大学教員に滞在費を与えて快く海外に送り出してくれる大学自体そうそうない。九州産業大学には篤く御礼申し上げたい。また研修実現にあたってやはり快く送り出してくださった国際文化学部のみなさま、とりわけ三浦香織学部長、本当にありがとうございました。私にとってはいろいろな意味で忘れ難い経験となりました。